



生き方への転換を

外的環境に影響されない

自助論

JIJORON

徳真会グループ
理事長 松村 博史

予測しがたい事が、次々と起こる時代をわれわれは生きなければいけない状況にあります。

世界的に見れば、サブプライムローンに端を発する世界同時不況、新型インフルエンザの世界的大流行、また、国内に目を移せば、一寸先の見えない政局や悪くなる一方の世相等々……数え出せばきりが無い程、不安な材料には事欠きません。

以前にもこの「おひさまだより」で「自助論」について書かせてもらいましたが、いま一度19世紀のイギリスの思想家サミュエル・スマイルズ(1812～1904)の書いた「Self-Help, with Illustration of Character and Conduct」(日本語で「自助論」)を読み返してみたいと思います。

スマイルズは、「人間が無知やエゴイズムや悪法の束縛から逃げられるかどうかは、ひとえにその人間の人格にかかっている。そして、国民1人1人の人格の向上こそが、社会の安全と国の進歩の確たる保障となる。つまり国民全体の質がその国の政治の質も決定するもので、国家の価値や力は国の制度ではなく国民の質によって決定される。」と述べています。

「天は自ら助くる者を助く」という言葉は、スマイルズの書から学んだ福沢諭吉が「学問のすすめ」の中に引用したのですが、我々の周りに起こる予測しがたい出来事も根源的に考えれば、全て起こるべくして起こっていることばかりだと思えます。

我々がその原因を作り、ゆえに自助の精神(外部

からの援助に期待するのではなく、自分の努力で道を切り開く生き方こそ、その人間がいつまでも、またどんな時にでも自分や周りを励まし、元気づける考えと行動を生み出すという考え方)が多くの人々に根づいたなら、我々は、一見予測しがたい外的出来事にも冷静に対応し、そこから、大いに学び、次に活力あふれた強い国家や社会の原動力を新たに生み出すことが出来ると思うのです。

そして、スマイルズは、「我々は皆、先人の技術や勉強によってもたらされた知恵や財産の後継者であり、我々はこの財産を損なうことなく自らの責任において守り育て、次世代の人々に手渡して行かねばならない」とも言っています。

現代に生きる我々は、自分達の事のみで終始するのではなく、先人の遺した偉大な財産を、次世代へどの様に健全な形で引き継いでゆくかを真剣に考える時に今あると思えます。

そうした視点で物事を捉えようと、今日我々の周りに起こっている様々な現象も、後世歴史的に観ると、きっと良い転換点であったと思えるに違い有りません。

人生は「白駒の隙を過ぎるが如き」といわれる様に、たとえ百年生きたとしても、それは本当にわずかな間でしかないという死生観に立てば、今を生きる我々は、次世代の為にも今まさに「自助」の生き方に立ち返りたいものです。